

来住廃寺36次調査現地説明会資料

調査主体：松山市教育委員会事務局文化財課

調査期間：平成21年5月19日より8月14日まで

確認された遺構と遺物について

昨年度、金堂基壇こんどうきだんの北側にて調査を行った結果（35次調査）、古代の瓦廃棄はいき土坑どこうと南北にのびる古代の溝状遺構みぞじょういこう、同じく南北にのびる古代の柵列さくれつを確認していました。これを踏まえ、今回はそれらの延長部分にあたる位置にそれぞれ調査区（1区および2区）を設定しました。

調査の結果、1区では南北にのびる溝の延長部分（SD001）および、瓦の葺き替えの際に不必要なものを捨てたと考えている古代（10世紀ころ）の廃棄土坑（SK001）を検出しました。



来住廃寺36次調査 1区 遺構実測図（S=1:100）

2区では、柵列の延長部分を確認することはできませんでしたが、近世長隆寺ちやうりゆうじの参道外側に並べられていたと考えられる石列の一部を確認しており、1区および2区からは長隆寺にともなう多くの遺物（銭貨せんか、軒丸瓦のきまる、軒平瓦のきひら、鯪瓦しやち、鬼瓦等）が出土しています。

また、2区において、掘立柱建物ほったてばしらたてもの（SB001）を1棟確認しました。円形柱穴の内部に柱を抜き取った痕跡がみられるもので、大きさが2間×3間であることを確定することができました。遺物は弥生土器が中心で、弥生時代から古墳時代のものと考えられます。

特に昨年度の調査では、瓦廃棄土坑から瓦塔がとう（瓦堂）の基礎部分と入口の一部と考えられる破片が出土していましたが、今回の調査では2区より瓦塔（瓦堂）の屋根と壁の接合部分の破片が出土しており、瓦塔（瓦堂）の全体像を知るための新たな資料を追加することができました。なお、今回出土した破片は、壁部分に窓まど（透かしす）を確認することができ、前回確認した資料と同様、円筒形に復元することができます。

また、調査区からは弥生時代の遺構を多数検出しており、松山平野の中でも規模の大きな集落が存在していたことが分かります。



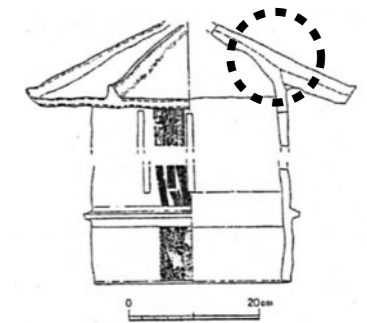
1区 SD001 を検出したようす



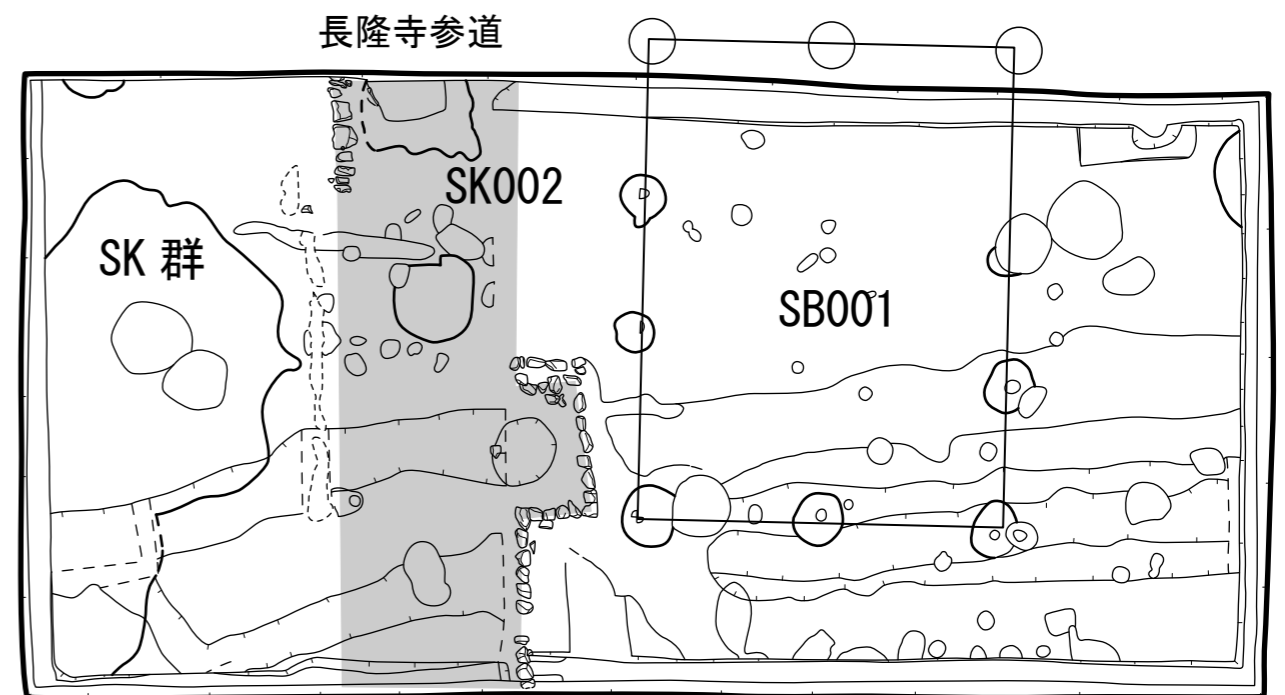
1区 SK001 を検出したようす



2区 SB001 を検出したようす



今回確認した瓦塔（瓦堂）の推定部位



来住廃寺36次調査 2区 遺構実測図（S=1:100）